

## 編集後記

ようやく会報ができあがる。大幅な遅れはひとえに事務局長であるわたしの怠慢、というか、わたしの繁忙ゆえである。あまり個人的なことを書くのは趣味ではないが、かくも忙殺的さまは、生まれてこの方というのはちと大袈裟にしろ、そうはなかったし、今後もできれば願い下げにしたい。大学で新専攻を立ちあげることや「アングラ以後四十年」など、やけに発語の出番が重なり、そのうえ、自分の書きものもあって、身動きがとれなくなったということである。愚痴をいってもはじまらない、ともかく、心より会員諸姉諸兄にはお詫び申し上げます。

わたしがいま追われているひとつはベルナール＝マリ・コルテスがらみのいささか長い論稿である。そこでも書き、ある発語の場所でしゃべったことではあるが、政治から資本からメディアまで、さらに、場合によっては学や「表現」さえも、今日のわれわれの世界はあらゆる詐術＝嘘がまかり通っている、まことしやかにといえはまた聞こえはいい、さにあらず、どれもが身も蓋もなく透け透けで、だ。故意にナイーブな語り方をするけれども、それでいいとされる時代がこの二一世紀というわけか。こういう時代に「演劇」を語るのはひどく難しい。演劇とは「嘘」であり、虚構であり、手練手管の約束であるとあまねく信じられ、平気でそう公言する連中がわたしの周囲にも輩出しているからだ。しかしながら、考えてみようではないか、「表現」には表現する者がおり、「虚構」にはそれをつくり、体現する者のいることを。演劇にはテキストを書く者、演出、裏方が、なかんずく役者のいることを。これはわが持論ながら、「ゲームの最大の、隠された規則＝ルールはそれがゲームではないということである」、ゲームですらそうだとすれば、オリヴィエ・ピイヤラヴォーダン流フランスの演出家のものであれ、こちらはだれでもいい、この国の作家、演出家のものであれ、同じことだろう。手練手管ならまだしも、素朴ですらないけちな拵えごとを、なんでもないものを劇芸術と名乗ってもらっちゃ困るよ、なのだ。想像や創造はなるほど根源的に自由である、書

くことも。それは死守しよう。とはいえ、「演劇」にもまたその「隠された規則」があるはずではないか、それを手放すわけにはいかないのだ（過労だ、無理だとこぼしつつ、そんな簡単な、簡単すぎる指摘のメモを『シアター・アーツ』に寄せた）。いまさらそれを検証しにずっと劇場に通いつづけているような案配かもしれぬ、わが日常たるや。

わたしの躰は責務に追われると息があがってしまうような、なにかすこぶる老年の気がして、ときにそれを意識せざるをえないけれども、だが、わたしより年かきの渡邊会長の近年の仕事ぶりときたらどうだろう。嘆息する。しかも、いづれもが今日の演劇の本質に深く関わる事象である。病み上がりで大丈夫だろうかと心配しつつも敬服の至り。だから、息が上がろうとどうだろうと、そのかれの鮮やかさを見とれている場合にあらず、当方もまた会長の采配下、演劇とは実は生の営みであるという観点をふたたび確認し、日本とフランス、もしくは、その双方向を見据えた研究や実践を遂行する、知の言説作業を協会として続けていきたいとわたしは思う。幸いにして、そのことをわたし以上によく知り、研究や表現現場の次代や次々代の俊英を育てることに邁進、奮闘する若い方々も少なからず集まってきている。かれらと手を携えつつ（会報発行はまさにかれらの尽力の賜物である、なお以前の会報が何号までか確認できないので今号を復刊第1号とする）、再々度、ゼロではないにしろ、一から種々をやり直す気である。当協会には過去の蓄積がないわけではない、むしろ、受け継ぐ系譜もあれば、先人たちの学思も厩大に遺されているが、しかし、そうした遺産で喰ってゆけるほどわれわれの現在が安閑というわけでないことは冒頭に振った話からも明瞭だろう。学問も創造も言説の創成も、いっさいは「記憶のいま」にかかっていることを噛みしめながら、わたしもまたここにいま立っていたいし、その思考を発語するパトスは最低でも保つ所存には変化ない。後記としてはやや感慨に傾いた。各位には許されよ。

(19/08. R・S)